

2024年度 学校関係者評価委員会の報告書

1. 目的：学校評価を通じた組織的、継続的な教育活動の改善
地域連携・協力による特色のある学校づくりの推進
2. 内容：学校の教職員が学校の理念、目標に照らして自ら教育活動について
行った評価結果を基本として評価を行う・
3. メンバー
事務局（渡邊学校長・中道担当理事・植村担当理事・大澤事務局長・池田副校長）
実習施設（3施設）—看護局長（部長）
久米田看護専門学校—副学校長
同窓会会長（卒業生代表）
4. 今年度の実施状況
第1回目—5月15日（水）
 - ・2024年度向け
2023年度学校関係者評価委員会の年間の検討課題のまとめからの再確認
 - ・年間スケジュール（2024年度活動計画）について
 - ・国家試験対策—2024年度学習支援計画
 - ・2023年度卒業生の卒業時アンケート及び国家試験対策のアンケート結果の報告第2回目—9月18日（水）
 - ・看護師養成所の課題
 - ・本校学生の現状報告
 - ・臨床現場からの現状報告と課題第3回目—2月19日（水）
 - ・今年度の自己点検自己評価結果のまとめ（次年度の課題を含む）
 - ・新カリキュラムについての評価
 - ・国家試験終了後の学生の状況
5. まとめ
教員全体が、閉校の予定から学校存続へと一転したことは、これまでの学修成果、教育活動から学校の特色として存在意義を認めてもらえたと受け止めている。だからこそ、今年度は特徴ある教育活動に積極的に取り組むことは社会の要請であると再認識している。
 - ① 教育理念・目的・育成人材像
前年比の平均値と変化はないが、学生の学習到達度が低くなっている現状から、改めて社会のニーズなどを踏まえた将来構想をしっかりと考え、理念・目的・育成人材像の見直しが必要である。
 - ② 学校運営
前年比の平均値よりわずかではあるが上昇している。
学生の定員が割れているにもかかわらず、学校教育の内容そのものや職員の処遇が変わらないこと、人材確保に関しても学生との関わる時間を増やし教育できるよう各領域担当教員を増やす方向で進められている。
このことに対して、学校運営に携わる職員は責任と使命を感じ、現状のまま

で良しと考えるのではなく、会議の在り方や、役割分担などの課題に取り組んでいる。

③ 教育活動

今年度は、新カリキュラムで教育した学生の卒業年度である。

学校が求めていた学生像と学生の現状には乖離があり、学科及び実習における成績評価の基準を適切に運営するための検討をせざるを得ない状況にある。カリキュラムの見直しに関してはすでに計画的に学習会を開き、講師会、合同実習施設会などからも客観的な意見を頂き検討し、変更する予定である。また、教員間の連携や教員自身が自己の専門性を向上させる研修などの参加があまりできていない。

教員の質向上のために組織的な取り組みを強化していきたい。

④ 学修成果

管理者が、就職や社会的評価に関して就職活動の成果に関する情報や推移を正確に把握し、学生の就職活動支援に活用している。

卒業生の社会的評価の把握は実習関連施設との連携もあり実態を把握できている。

実習病棟で卒業生が現場で活躍している姿を目にしたときは、教育の成果を感じられる瞬間で、社会的評価を把握する機会になっている。

⑤ 学習支援

昨年同様学生の生活指導、保護者との連携には、副学校長および教務主任を中心に相談体制がとられている。予想もしていなかった学習量や費やされる学習時間の中でついていけない学生に対しては、科目担当教員や学習支援の教員が関わり、学習意欲が持ち続けられるよう個別指導する時間を作っている。

今後も、学校全体として相談体制を整備し、退学に結び付きやすい心理面、学習面の問題解決には適切に対応していく。

⑥ 学生の募集と受け入れ

多くの高等学校における、進路相談や学校説明会に参加し、教育活動の情報提供を積極的におこなった。

また、オープンキャンパスや学校説明会を実施し教育活動の内容を直接紹介、体験できる機会となり効果的な募集活動を行えた。

しかし、18歳人口の減少と大学の増加により、近隣の学校も同様に学生募集には苦慮している

今後は、募集人数が増加するためには社会人入試が重要となる。

⑦ 財務

昨年に引き続き今年の入学者も定員割れをしており、収入と支出のバランスがとりにくく、財政基盤が不安定になりつつある。

⑧ 社会貢献・地域貢献

学生は、地域・在宅看護論実習で初めて社会生活を体験している。

その学習成果が社会に還元できるよう、縦割り活動の中で積極的に取り組む方向で考えている。

各自治会の取り組みや、地域の美化月間に参加。

次年度は、文化祭を取り入れ地域への広報活動、地域の人たちの健康チェック等を行い広く学校を知ってもらい、その交流の中でボランティア活動に繋がれたらと考えている。

- ⑨ 学校関係者評価委員会・委員から
- ・学習支援をしっかりとされていることは理解できた、言い換えれば学習レベルの低い学生が多くいるということであり、現場はしっかりとそのことを受けとめないといけない。
 - ・現場で先生方を拝見していて、学生は成長しているが教員の自己肯定感が低いように思う。
いつも疲れた感じがする
 - ・現場でも身体症状の出るスタッフが多くなってきている。何とかしてあげたいと思うが、どうもできない。
学生の時から身体症状が出る学生は、社会人としてどうかという戸惑いもある。
 - ・非常勤講師を多く出しているが、講師は自分の講義の振り返りをしているが、寝ている学生、ペットボトルを机の上に置いている学生、他のことをしている学生がいる。
それで良いのか
 - ・若い学生が多く、学習を積んでも社会人としての自覚が育っていかない
 - ・学生はやらされている感じが強ければ意味がない
1年次から、目的、目標を持つことがいかに大事かを学生としっかりやり取りすることが大切
人間は意欲を反映していけば理想を現実にしたくなる。
 - ・教員が元気ない、お手本がよくないと学生も育たない。(教員を元気にする)

⑩ 卒業生の就職状況（33名卒業）

岸和田市内	—	21名	（実習施設への就職）
泉州地域	—	10名	
堺	—	3名	
和泉	—	6名	
貝塚	—	1名	
大阪市内	—	1名	
未就職者	—	1名	

⑪ 次年度の課題

新カリキュラムで教育した学年の卒業年であることから、講師会（非常勤講師）や合同実習指導者会（実習指導者）からご意見を頂戴し次に向けての課題を明確にし教育課程の見直しができた。

学ばせ方や取り組みなど方法は考えることはできているが、最も大切なのは学生との教員のかかわり方である。

教員と学生との関係ができているのか、コミュニケーションエラーが起きていないかをしっかり認識することが重要である。

関係ができているならば、厳しくとも学生に伝わる。

そのことを意識して、学生との相互関係を築いていきたい。